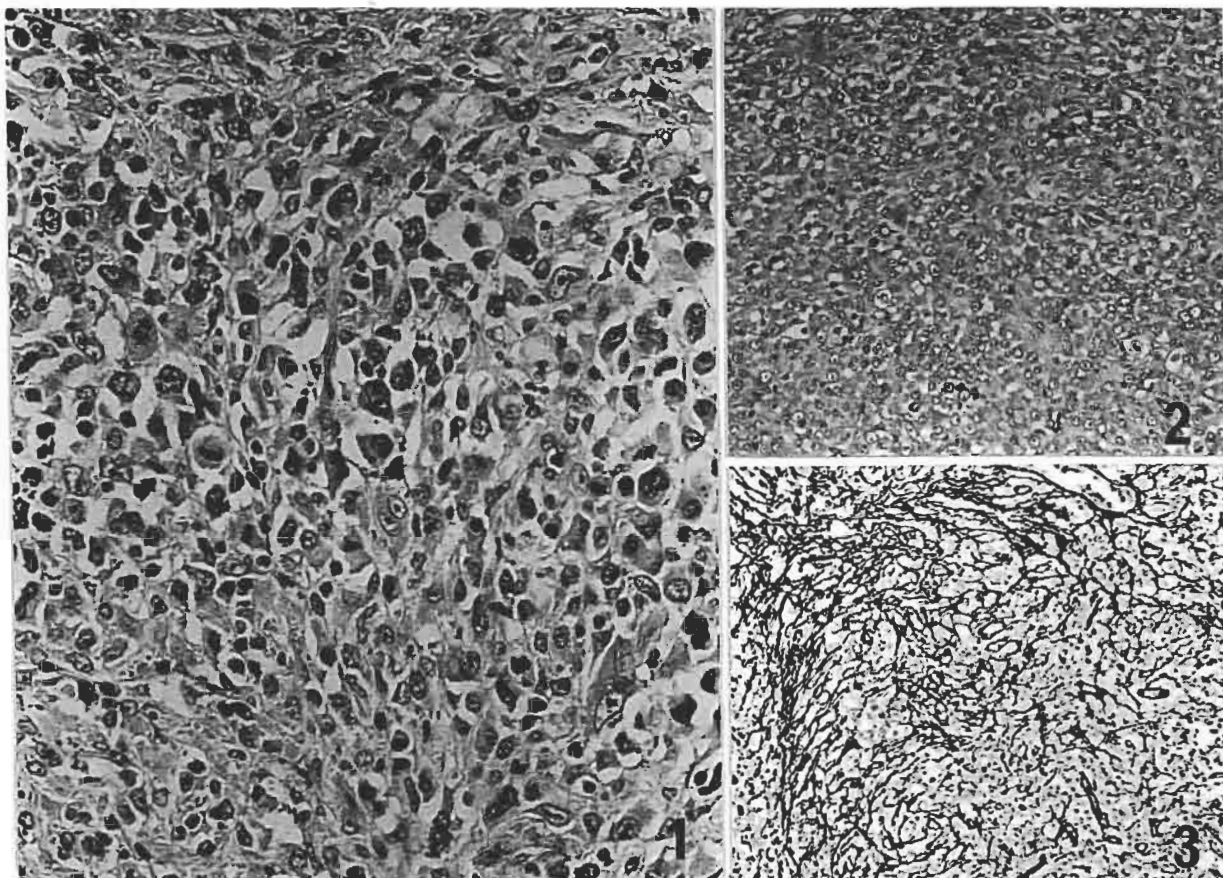


# 犬の縦隔腫瘤

山口大学農学部家畜病理学教室出題 第33回獣医病理学研修会標本No.605



**動物：**犬，四国犬，雄，17歳。

**臨床事項：**某動物病院で、削瘦・嘔吐の治療を半年間受けていた。その後の半年間は、臨床症状は改善していたが、呼吸速迫，容体悪化で再来院した。X線検査で、縦隔膜後部の陰影度増大と右胸腔内の陰影を認め、緊急処置として、胸水約1ℓを除去したところ急死した。

**肉眼所見：**右胸腔内には混濁胸水約1ℓの貯留と、縦隔膜後半部から横隔膜全体に多数の灰白色で形状不整の隆起した充実性腫瘍が認められた。これらの腫瘍と胸壁や肺との癒着はなかった。その他胸・腹腔臓器に著変はなかった。

**組織学的所見：**本腫瘍は大部分が異型性・多型性の強い細胞質の豊富な多角形の組織球様細胞と短～長紡錘形の繊維芽様細胞から成る増殖部（写真1，HE，×370）と部分的には比較的成熟した細胞の密なシート状増殖部（写真2，HE，×170）とからなっていた。以上のような腫瘍増殖巣はやや幅広い結合織で被包され分葉状をなしていた他、散在性の壊死巣も認められた。一般には多型性性格の強い部位

には、核分裂も多く、好塩基性～好酸性の核小体の目だつ腫瘍細胞や奇妙な核を有する単核～多核巨細胞が認められた。このような腫瘍増殖巣内には好中球，好酸球，リンパ球及びプラズマ細胞の浸潤が著明で、一部の腫瘍細胞による赤血球や白血球の貪食像や、豊富な細網線維～膠原線維が認められた（写真3，鍍銀，×85）。組織化学及び免疫組織化学的検索で、腫瘍細胞は非特異的エステラーゼ， $\alpha$ -1アンチトリプシン及びリゾチーム陽性を示した。その他PTAH染色で横紋は認められなかった。

**考察及び診断：**本例は組織球様細胞と繊維芽様細胞とから成り、悪性線維性組織球腫（MFH）と診断される。MFHは通常（花むしろ型，多形型），粘液，巨細胞，黄色肉芽腫及び類血管肉腫の各型に分類されるが、本例は花むしろ模様は目立たず、通常型の多形型に分類されると思われる。本例の発生部位の特定は困難であるが、腫瘍増殖巣内に萎縮したリンパ濾胞が認められることから縦隔部リンパ節から発生した可能性がある。